石川県七尾美術館だより

平成25年１月１日発行
編集・発行　石川県七尾美術館

第72号（冬号）

ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM

老若男女・人物を楽しむ
「赤いチュチュ」
寺井重三（1928～　）
平成８年（1996）第58回一水会展

展覧会紹介

平成24年12月21日（金）〔開催中〕～
平成25年2月11日（月・祝）

「季節を感じる作品たち」
「老若男女・人物を楽しむ」

現在、当館には所蔵作品617点と、お預かりしている寄託作品74点の、合計691点が収蔵されています。

本展では、その中から2テーマで古美術から現代作品まで47点を紹介しています。

◇第1展示室

「季節を感じる作品たち」

春夏秋冬とめぐっていく四季。日本には四季があり、人びとは古来より四季の変化に大きな影響を受けながら、それに順応する形で生活してきました。そして、その四季があるがゆえに、春は桜・夏は海・秋は紅葉・冬は雪というように、豊かな風情を感じることもできるのです。

それらは美術工芸品にも反映され、四季折々の作品などが数多く制作されてきました。

本展では「池田コレクション」などより、季節情緒豊かな作品24点を紹介しています。

★「池田コレクション」とは、七尾市出身で岐阜県大垣市を拠点に活躍した経済人で、美術品にも造詣が深かった池田文夫氏（1907～87）が生前に蒐集し、氏の没後七尾市に寄贈された美術工芸品です（現在204点）。

平成25年1月4日（金）～
4月7日（日）
休館日については裏表紙をご覧ください

◆日本画「少女」百々俊雅

ある夏の日、西瓜畑の中で麦わら帽子をかぶった娘を描いたもので、日焼けした小麦色の肌に白いワンピース、まっすぐに作者（父）を見つめる目が印象的な作品です。

◆工芸「織部菊図折込鉢」池田コレクション

青織部の誰ヶ袖形の鉢で、見込には秋の小菊がのびのびとした筆線で描かれています。

裏面三方に足を付け、他の一方は器そのものを歪めて足の代わりとするあたりは、いかにも織部らしい形状といえます。

◇第2展示室

「老若男女・人物を楽しむ」

ひと言で「人物」といっても、性別や年齢、人種や国籍、容姿や性格など様々です。その「人物」たちがみせる折々の姿、様相は作家たちを魅了し、格好のモチーフとなりました。

本展では有名無名・実在架空を問わず、人物たちが彩ってきた色々な作品を紹介しています。

★長谷川信春（等伯）筆「陳希夷睡図」も展示中。

◆彫刻「バグサンハン川の舟頭A」田中太郎

昭和45年、作者がマニラへ研修旅行に出掛けた際に取材したもので、川下りの名所で乗客を待つ舟頭の、しっかりとした骨格と引き締まった筋肉が力強い作品です。

◆日本画「美人図」伝奥村政信　池田コレクション

奥村政信は、元禄末から版元・奥村屋を経営し、版画や肉筆画などで活躍した人物で、本図には羽根つきをする女人と、無邪気に遊ぶ幼児が描かれています。後方の花をつけた梅樹や笹も相まって、初春のめでたい雰囲気が伝わってきます。

◇共通観覧料

	個人	団体
一般	350円	280円
大高生	280円	220円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。

平成25年2月23日（土）～4月7日（日）

「茶道具いろいろ～池田コレクションを中心に～」
「緑色のアート」

◇第1展示室

「茶道具いろいろ～池田コレクションを中心に～」

茶道。平安時代頃の飲茶の風習に起源を持ち、その後千年以上の時を経て現在に受け継がれる、日本を代表する芸道のひとつです。

当初薬用であったのが鎌倉時代に栄西によって喫茶の風習が伝えられ、室町時代の「闘茶」「書院の茶」を経て、村田珠光が「わび茶」の基礎を築きます。そして武野紹鷗、続いて桃山時代に千利休が登場し、彼らによって「茶の湯」が成立することとなりました。

江戸時代に入ると「茶の湯」は「茶道」とも呼ばれるようになります。そして同時代も中期以降になると、それまで武士階級や一部の豪商といった、支配階級・知識階級の占有物であった「茶道」は、経済活動の活発化により力をつけてきた町人たちにも受け入れられ、嗜む人口が飛躍的に増加。それに伴い「家元制度の導入」などといった組織化も行われ、全国に普及していきます。

そして明治時代以降、それまで男性のみの世界であった「茶道」に、「教養」としての要素が加えられたことによって多くの女性たちが参加。さらに裾野を拡大します。また、岡倉天心らによって海外にも紹介され、「茶道」は日本独自の文化として、世界にも広く認知されていきました。

現在も、数多くの人びとによって愛され続けている「茶道」。そこでは絵画・書・工芸など、多岐にわたり数多くの道具が使用されます。それらは「茶道」の長い歴史、そして人びととの結びつきが反映された、日本の「美意識」であり、「こころ」を表すものといえるでしょう。

本展では、当館所蔵品より「池田コレクション」を中心に、様々な作品を紹介します。

「志野白釉香合」
（池田コレクション）

「織部茶碗　銘頭巾」
（池田コレクション）

「肩面広口釜」
（池田コレクション）

「織部唐草文敷瓦」
（池田コレクション）

◇第2展示室

「緑色のアート」

緑（みどり）
①青と黄との間色。草木の葉のような色。
②草木の新芽。また、初夏の若葉。広く植物一般。転じて森林、自然などの意としても用いられる。
（『広辞苑』より）

光の3原色のひとつである緑色。日本において「みどり」という言葉が使用されるようになったのは、平安時代頃からとされ、当初は「瑞々しさ」を表す言葉であったのが、やがて新芽の色を表すようになったといわれます。そのためか「緑」には森林や自然などを表す意味もあり、自然と繋がりの深い色だといえます。

また、かつて緑色も「青」と呼ばれていたことから、現在でも「青野菜」「青信号」などの言葉が示すように、緑色のものに「青」を当てはめて使用される例もみられます。

さらに、緑色は「若さ」や「クリーン」、「安全」などのイメージも持っています。例えば、信号の「進め」は緑（青）ですし、安全地帯は「グリーンゾーン」と呼ばれます。また、「グリーンピース」のように、環境保護団体などがよく使用する色でもあります。

つまり、緑色は人々の心を落ち着かせる効果を持っている色である、といえるでしょう。

無論、美術工芸にも多岐にわたって用いられる緑色。本展では当館所蔵品より、緑色を効果的に使用している作品を、絵画や工芸などの幅広いジャンルで紹介します。

「織部草花文角鉢」
（池田コレクション）

「草叢での会話」堀場良夫

「渓橋雨後図」
川合玉堂
（池田コレクション）

◇共通観覧料

	個人	団体
一般	350円	280円
大高生	280円	220円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。

当館所蔵品貸出情報（1月1日現在）

①陶磁器「織部柳文筒向附」　5客
②陶磁器「織部亀甲文富士形小手鉢」　1口
③陶磁器「織部楼閣山水画角透鉢」　1口
④陶磁器「美濃伊賀水指」　1口

※全て「池田コレクション」

展覧会名
「織部―ソノ器、ヘウケモノ也―」（仮称）
会場：土岐市美濃陶磁歴史館
（岐阜県土岐市泉町久尻一二六三）
☎0572（55）1245
会期：2月28日（木）～5月12日（日）

「織部亀甲文富士形小手鉢」
（池田コレクション）

「美濃伊賀水指」
（池田コレクション）

貸館催し物案内

アートホール

正派若柳流一柳会　踊り初め　無料入場

1月27日（日）
開演　午後2時

お稽古に励んだ日頃の成果を発表するとともに、さらなる研鑽を年頭に誓い、舞台に立ちます。

主　催　正派若柳流一柳会
連絡先　若柳吉一賀　☎0767（52）3770

お別れ発表会　無料入場

2月23日（土）
開演　午前9時30分

小丸山保育園の発表会があります。今回は2度目の発表会となり、年長児にとっては最後の発表です。可愛い未満児の遊戯や年長児のりりしい姿を是非見に来てください。

主催・連絡先　小丸山保育園　☎0767（53）3700

市民ギャラリー　予告

榎本友康遺作展　無料入場

4月5日（金）～7日（日）
初日は午後0時から
最終日は午後4時まで

昨年1月、60歳で亡くなった志賀町の作家、榎本友康の遺作展。パステル画や焼き物を中心に展示する。

主　催　榎本友康遺作展実行委員会
連絡先　石谷克人　☎090―1630―1367

全館　予告

特別展覧会「能登の真宗」
同時開催：全能登ジュニア美術展覧会

4月13日（土）～21日（日）会期中無休
初日は午前11時から

浄土真宗の宗祖親鸞聖人の七百五十回御遠忌を記念し、東・西本願寺の法宝物や能登地域寺院の什宝物を特別展示する。又、同時開催として、幼児から中学生の書道・絵画・立体作品と、漫画家の井上雄彦氏が制作した屏風『親鸞』も展示する。

入場料　500円　※中学生以下無料
主　催　能登教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌委員会
連絡先　能登教務所　☎0767（53）0058

「中町進展」ギャラリートーク報告

当館秋の展覧会「日本画家・中町進展」会期中の10月13日（土）、中町進先生によるギャラリートークが開催されました。

今回の展示は、先生の日展初入選作より平成17年の近作まで、日本画18点とスケッチ10点を紹介する内容で、トークは最初期制作の作品「山の田」よりスタート。

「山の田」で日展に初めて入選した時の嬉しさ。抽象芸術全盛期に、抽象と具象の狭間で悩みぬいたという「黒の時代」。憧れだった群青の顔料をふんだんに使った「青の時代」での制作への喜び。俯瞰構図に自らの表現を見出し、日本やヨーロッパの街並みを描き続けた「街の時代」のこと云々。先生は作品にまつわる様々な思い出を、制作のテクニックにも言及しつつ、所々でユーモアを交えながらわかりやすく解説をされていきました。

中でもトークをとおして強く感じられたのは、先生の師である池田遥邨氏への強い「敬慕の想い」。節目ごとに「遥邨先生の教えでは…」と話しておられたのが印象的でした。

最後には、先生より参加者にサプライズのプレゼントもあり、盛り上がりの中、トークは終了しました。中には終了後、先生に熱心に質問をされている方も…。

ご参加くださいました皆様、そして貴重なお話をくださいました中町先生に、この場を借りまして、改めて御礼申し上げます。

ボローニャ展報告

毎年皆さんに楽しんでいただいています「ボローニャ展」。東みなと保育園年長児の鼓笛隊演奏で幕を開け、多くの方のご協力で、たくさんのイベントを開催できました。

「かんたん絵本を作ろうよ！」

絵本の会もこもこさんの協力で開催。子どもたちの創作意欲に脱帽。

「『のまりん』の紙芝居劇場」

大人も一緒になって楽しみました。野間先生ありがとうございました。

「ナイトミュージアム」

夜の美術館は、どんな感じなんだろう？参加者だけの秘密です。

「おはなし劇場」

ＮＰＯ法人ぽっかぽかの皆さんは人形劇「おむすびころりん」で大忙しでした。

第13回　石川県七尾美術館 友の会鑑賞の旅を終えて

去る10月14日、まだ夜も明けきらぬ午前6時過ぎ『友の会鑑賞の旅』（参加者＋引率者）32名を乗せたバスは、信州・長野へ向けて出発しました。

最初の見学地は『国宝・松本城』。到着予定時刻より遅れること約30分、ボランティアガイドさんの丁寧な説明を聞きながら、お堀周りから入城門へ向かいます。チケットを先回りして購入するも空しく目の前には「『入場制限』ここから1時間待ち」の看板が…。天守内は一方通行のため、一度入れば、待ち時間と見学時間を合わせ2時間以上かかってしまいます。参加者の皆様には大変申し訳なかったのですが、天守内入場を断念してもらい場内自由散策とさせていただくことにしました。当日は「お城まつり」なるイベント開催中で、お茶会のテントや盆栽の展示などがあり、人出も多く「入場制限」にも納得せざるを得ません。

何度もお詫び申し上げながら、次の見学先、『旧開智学校』へ。擬洋風建築の校舎、当時の教室を再現した部屋、明治から平成までの教科書などの展示に、「懐かしいわ～」「こんな机あったねぇ」など会話も弾みます。

出発から6時間あまりを過ぎ『ホテル花月』にて、ようやく昼食の時間。松本民芸家具で統一された落ち着く空間で、信州ならではの『そば会席』をいただきました。ほどよくお腹も満たされ、外は散策にもってこいのお天気♪列をなして女鳥羽川沿い『なわて通り』に向かいます。

国宝・松本城にて

通りには土産物屋や布小物屋、オープンカフェなど様々なお店が軒を連ねています。素敵な「のれん」を買った方、新鮮なりんごや野菜を買った方、短時間でしたが有意義に過ごされたようです。

再びバスに乗り、最後の見学地『安曇野ちひろ美術館』へ。同館職員の方に解説をしていただいた後、各自、自由に鑑賞。やさしい絵本原画の世界に心も和みます。ミュージアムショップには、種類豊富なグッズが揃っており、時間ぎりぎりまでお買い物をされている方もいらっしゃいました。

残念ながら紅葉には少し早い時期でしたが、帰路は国道を利用し、水墨画のような夕暮れ迫る渓谷の風景を楽しむこともできました。地元「A・コープ白馬」特製の夕食弁当もおいしかったですね。

時間に追われ、ご迷惑をおかけしましたが、参加者皆様のご理解、ご協力のもと無事旅行を終えることができました。どうもありがとうございました。

世界でひとつ、自分だけの「印」を作ってみませんか？

友の会美術講座

―やさしい篆刻―

七尾市在住の書家・大場濯川先生を講師におお迎えし、石材に印刀で好きな文字を彫る『雅印』を制作します。文字デザインは、大場先生がしてくださるので初心者の方もご心配なく♪

日　時…平成25年1月20日（日）
午前9時30分～午後4時頃

場　所…楽屋（アートホール横）

参加費…2，500円（材料費等）
※友の会会員以外の方は3，000円

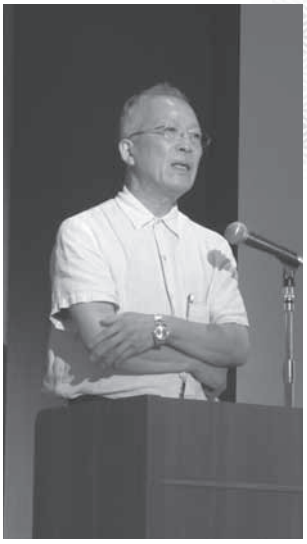
定員は15名ですが、少々余裕がありますのでどうぞお気軽にお申込みください！

等伯コーナー

長谷川等伯展講演会報告

「等伯中年期の作品を読む ―研究史の視点から―」

講師　鈴木廣之氏（東京学芸大学教授）



長谷川等伯については多くの研究があり、色々な方が色々なことを述べられているのは、皆様よくご存知だと思います。その研究史を振り返ることによって、これまで等伯がどのような評価をされてきたのかがわかります。そこで今回は、等伯の研究史を回顧しながら、講演テーマになっている等伯の中年期、50歳代の時期を中心にみていきたいと思います。

◆等伯はどのように評価されてきたのか

等伯が評価され始めたのは昭和初期のことです。等伯と同じ桃山時代の画家と比較すると、ずいぶんと遅いんですね。その理由としては『本朝画史』（狩野永納編・元禄6年刊）など江戸時代の画家資料が狩野派中心の内容で、等伯の評価が高くなかったこと、そして等伯の作品には襖絵が多いのですが、当時襖絵には落款を記さなかったので、どの作品が等伯筆なのかわからず、その全貌をつかめなかったことなどが挙げられます。『本朝画史』の等伯の項には、本法寺（京都市）の「仏涅槃図」が言及され、当時等伯の有名作品であったことが窺われます。しかし一般的に等伯の認知度は低かったようで、現在一番有名な「松林図」（東京国立博物館蔵）なども知られていません。

『國華』という美術雑誌があります。明治22年（1889）に岡倉天心と高橋健三によって創刊された、現在世界一長寿の美術専門誌です。この雑誌からも等伯の評価の流れがわかります。まず、明治26年、第47号に福岡家所蔵の「山水図」が掲載されたのが等伯の名が出る最初になります。次は同年（第48号）の「牧馬図屏風」で、こちらは現在東京国立博物館の作品。さらに明治39年（第198号）の隣華院（京都市）の「山水図襖」、大正7年（第337号）の龍泉庵（京都市）「枯木猿猴図」と続きます。なかには有名な作品もありますが、現在では首を傾げざるを得ない作品も等伯筆として紹介されていて、等伯の認識がまだ定まっていなかったことを窺わせます。

その状況が大きく変わったのが1930年代頃からで、それには「松林図」が登場したことが大きかったといえます。「松林図」が出た時、専門家も大変驚いたようですね。同図は昭和9年（1934）、熊谷宣夫が『美術研究』第25号で紹介したのが最初ですが、その後間もなく国宝（旧国宝）に指定されます。これは異例のスピード出世といえ、それほどインパクトのある作品だったんですね。それから、等伯の代表作として「松林図」と共に有名な智積院（京都市）の障壁画も同じ頃、昭和5年に土田杏村によって等伯筆であると論証されています。これらのことは、長谷川等伯とは一体何者だと大きく注目されるきっかけになり、評価をぐんと高めることとなりました。

そして土田杏村の跡を継いで等伯の研究を行ったのが、土居次義先生です。土居先生が大学を卒業したのが昭和6年で、その後現在の京都国立博物館に就職します。その頃より先生は京都のお寺を巡り、等伯の作品を見出していきました。襖絵には落款がありませんから、絵のスタイルを丹念に調査しながら論証されていったんですね。これは大変な作業ですが、先生は独力でされました。本当に凄いことで、大きな功績だと思います。これが1930～40年代で、ここでようやく等伯の全貌がみえはじめてきた。桃山時代といえば金碧障壁画を連想させますが、等伯の場合むしろ水墨画の方が魅力的な作品が多いですね。この点が同時代の画家とは違うところで、等伯評価の特色といえるのではないでしょうか。

戦後、土居先生に続いて等伯の研究で大きな足跡を残したのが山根有三先生で、私の師匠です。山根先生は琳派の研究で有名ですが、戦前より等伯の研究もしていました。京都国立博物館に勤務し、土居先生の後輩にあたるんですね。そこで問題になったのは、信春時代と等伯時代の画風を比較して、なぜ大きくかけ離れているのか、ということでした。それだけ多くを学んだからだ、となるのですが、ではどこからどうやって学習したのか、という疑問が生じます。山根先生はこの問題をはじめ、等伯一族の解明などに取り組み、大きな成果を挙げました。

等伯が学んだ代表的画家が牧谿です。牧谿は中国南宋から元時代の禅僧で、優れた水墨画を残しました。等伯が学んだ牧谿の有名な作品が、大徳寺（京都市）の「観音猿鶴図」3幅対で、「水墨画の極地」といわれる傑作です。墨というのは、水との調合具合で白から黒の間の無限の階調を表現できます。水墨画とはその墨をうまくコントロールすることによって、形のないもの、例えば光・空気・霧・水なども描ける技法で、その極意を極めた偉大な画家が牧谿なんです。等伯筆の「枯木猿猴図」や「竹鶴図屏風」（東京都・出光美術館蔵）などは牧谿の「観音猿鶴図」を実見していないと描けない作品です。これらの作品からは、湿気を含んだ濃密な大気が感じられ、等伯が牧谿から学んだ「形のないもの」の表現に苦心していることがわかります。

◆「松林図」の謎と魅力と

「形のないもの」を表現した、最も有名な等伯作品が「松林図」であることに異論はないでしょう。同図は流れる空気や湿潤な湿気を見事に表現した、等伯中年期を語るうえでは絶対欠かせない名作です。ただ、「松林図」は非常に謎めいた作品としても知られています。この屏風絵が最初に紹介された時、明治時代に活躍した政治家・福岡孝悌家のコレクションでした。孝悌は美術品のコレクターで、明治35年に所蔵している作品の目録を作ります。ところがその目録には「松林図」が掲載されていません。すると、孝悌が「松林図」を入手したのが明治35年以降ということになるのですが、いつどこから手に入れたのかがわからないんですね。つまり、伝来が不明なんです。

次に「松林図」に捺された2種の印章が、等伯の基準印と違うことがあります。なぜなのかは謎です。私を含めてどの専門家も作品は等伯筆間違いなしと考えていますが、印章だけは違うといっている。それでは、等伯自身がこれを捺したのではなく、等伯が亡くなった後に別の人物が捺したとなると、いったい誰が、どんな理由で捺したのかがわからないんですね。

それから、紙継ぎがずれているのも謎です。当時は大きな紙がないので屏風などは紙を繋げているのですが、本来ですと紙継ぎの位置が横一直線にならなければならないのに、場所によってかなりずれているんですよね。これについても色々な説が出ていますが、有力なのが元々「松林図」は屏風ではなく襖であったという説。70年代に武田恒夫先生が提唱されたもので、これを完成作ではなく直前の画稿ではなかったかとされました。すると「松林図」には完成作があったことになりますが、画稿の段階でこの完成度ですから、完成作を想像するとゾクゾクしますね。

最近では武田説を承けた郡司亜也子さんが、紙継ぎのずれを直したらどうなるかを検証されており、みてみるとちょっと面白いことがわかります。それは、現状での松林の配置が絶妙だということ。松が凸凹になるようにうまく配置されて非常に面白い。それに対してずれを直したものは、松の高さが揃ってなだらかな一直線の配置になってしまい、実はあまり面白くないんです。現在のようなバッと前に出てくるような感じがなくなってしまうのですね。ですから、これを屏風にしたのは相当なセンスを持った人物ではないか。画稿だったものを屏風にしたのは恐らく保存のためで、鑑賞もできて保存にも適しているということで、仕立てたのだろうと考えられます。しかも画面から判断すると、現在の部分以外にも絵があったと思いますが、それを捨てるという大胆なこともやってのけています。そして、この人物こそが落款を捺したと思うのですが、そんなことができたのは一体誰なのか。謎は深まるばかりです。

「松林図」の紙継ぎなどから推定すると、1面の幅が80センチ程度の襖であった可能性が考えられ、つまり禅宗寺院の方丈にはめられた襖という仮定ができます。禅宗寺院の方丈は6室で形成され、南に面して東西に並ぶ3室が主室です。明かりをとるために南方向を開口部にするのが基本ですので、襖は中央の部屋で南面を空けたコの字形、左右の部屋はそれぞれ南面と外に面する東西面を空けたL字形に配置されます。そして方位と四季は対応していて東が春、南が夏、西が秋、北が冬となり、絵もそれにあわせて描かれるのが普通です。「松林図」をよくみると、左隻右上に雪山が描かれているあたりが、冬の景色ということになります。ここを角にしてL字形の配置を考えると方丈の表側3室のうち、東側の部屋におさめると方位と季節がうまく対応しそうです。「松林図」の完成作が襖だったとすれば、このような位置に配置されていた可能性があります。

以上のように謎が謎を呼ぶ「松林図」。「モナリザ」もそうですが、傑作には謎が多い。逆にいえば、名品にはそのような謎めいたところがあるからこそ魅力的なのかも知れません。

◆「自雪舟五代」宣言と画風変化の関係

等伯が晩年に「自雪舟五代」を名乗ったのは皆さんよくご存知と思います。その理由について、山根先生は狩野派に対抗するため「自分は雪舟の正系を受け継いだ正統派の画家だ」と宣言する必要があったとの説を出されました。雪舟の代表作「破墨山水図」（東京国立博物館蔵）には、雪舟が学んだ中国の画家として、李在という名が自筆されています。李在は中国明時代の「浙派」といわれるグループに属する宮廷画家でした。実は等伯晩年期の作品が、この李在の画風によく似ているんです。例えば、真珠庵（京都市）や天授庵（京都市）の襖絵など。つまり、等伯が李在を勉強したのではないかと感じるんです。なぜ李在を勉強したのかといえば、雪舟が学んだ画家だから。雪舟も学んだ李在を学ぶことによって「自雪舟五代」を名乗ったことに実態を持たせる、正当化する手段としたのではないかと思うんですね。

但しこの李在、牧谿とは全然作風が違います。牧谿がいわば「リアリズム」を表現したのに対して、李在は「アバンギャルド」。180度違います。ある意味乱暴といってもいいくらい、等伯にとっては大転換ですね。雪舟流を名乗るためとはいえ、なぜ牧谿を捨ててまでそこまでする必要があったのか、等伯に聞いてみたい気がします。ただ、その生涯を振り返ると、能登にいた頃から何回となく画風を変化させています。等伯は世界的にみてもほとんど例がない、大胆な変貌を繰り返した画家だと思います。

本文は平成24年8月26日に行われた「長谷川等伯展」特別講演会の内容を、当館の責任においてまとめたものです。

これからの展覧会予定

平成25年4月27日（土）～6月2日（日）

◆第１展示室　「池田コレクション名品展」（仮称）

当館所蔵品の中核で、工芸・絵画・彫刻など幅広いジャンルの作品で構成される「池田コレクション」。本展ではコレクション204点より、貴重な作品約30点を紹介します。

「根来手力盆」（池田コレクション）

◆第２展示室　「長谷川等伯一門と能登」（仮称）

桃山時代を代表する絵師・長谷川等伯（1539～1610）を生み出した能登。本展では、現在も能登地方に伝来する等伯や「長谷川派」の仏画などを展示し、等伯一門と能登との深い関わりを紹介します。

石川県指定有形文化財「愛宕権現図」
長谷川信春(等伯)筆

◆第３展示室　「所蔵現代作品展」（仮称）

能登の美術館として、当館では開館以来「能登ゆかりの作品」を中心に数多くの美術品を、多岐にわたって収集してきました。本展では、それらの所蔵品より現代作品をテーマとして、様々な作品を紹介します。

平成25年度　石川県七尾美術館友の会会員募集のご案内

新年度友の会会員を次の要領で募集いたします。現在会員の方で更新をご希望される方は改めてお申込み下さい。
お申込みのない場合はそのまま退会となってしまいますのでご注意下さい。

★入会手続き★

①受付開始　３月１日(金)から【年度会費1,000円】

②受付場所　当館受付カウンターまたは郵便受付（郵便振替用紙をご利用ください）

※郵便局備え付けの振替用紙の通信欄に必要事項《会員の区別（更新･新規･元会員）･郵便番号･住所･電話番号･氏名･生年月日》をご記入のうえ、会費を添えてもよりの郵便局窓口へお出し下さい。払込料金120円は申込者負担となります。

郵便振替口座	００７１０―０―５０７９５
加入者名	石川県七尾美術館　友の会

平成25年度 石川県七尾美術館
友の会会員証

★友の会に入会すると…こんな特典があります！★

- その１　当館主催展覧会の観覧料が割引になります。
- その２　情報満載「美術館だより」（年度内４回発行)が郵送されます。
- その３　相互割引提携館主催の展覧会観覧料が割引になります。（会員本人のみ）
- その４　特別企画展開会式･内覧会へご招待。（無料）
- その５　販売グッズが割引になります。（一部除く）
- その６　喫茶室利用代金が10%割引になります。

このほかにも友の会会員限定の催し、特典がありますのでぜひ更新、ご入会ください♪

割引、プレゼントなど特典いろいろ！
ぜひ当館でもご利用ください。

飛行機……能登空港からのと里山海道利用約45分
車……金沢からのと里山海道利用約１時間15分
タクシー…JR七尾駅から約５分
徒歩……JR七尾駅から約20分
市内循環バスまりん号
…JR七尾駅前「ミナクル」ビル裏バス停から西回り「七尾美術館前」下車
ななおコミュニティバスぐるっと7
…JR七尾駅５番乗り場から西コース「小丸山台１丁目」下車

休館日のお知らせ

１月～３月

- ◆１月　１～３，７，15，21，28
- ◆２月　４，12～22，25
- ◆３月　４，11，18，21，25

◎次号・第73号（春号）は４月１日発行予定です。

〒926-0855　石川県七尾市小丸山台一丁目１番地
TEL(0767)53-1500 ／ FAX(0767)53-6262
http://nanao-art-museum.jp